

自称・対称の代名詞

英語では、自分の事を称して言ふ言葉(一人称)は“I”の一語しかなく、また、相手を指して言ふ言葉(二人称)も you の一語しかない。英語ではこれを“代名詞”と言って実に頻繁に用ひるが、わが国ではあまり使はず、使ふ場合にも“名詞”を使ふのが普通であって、それも、相手の身分の高低や親疎の度合ひに従って使ひ分けるのが普通である。

一般に、最も鄭重な言ひ方としては、自称には“私(わたくし)”といふ言葉を使ひ、対称には“あなた様”といふ言葉を使ふ。この“私”といふ言葉は、“公(おほやけ)”に対する言葉であって、本来は“普通名詞”の言葉である。また、“あなた”は、「あの方(あちらの方角といふ意味)」といふ意味の言葉であり、基本的にはやはり“普通名詞”である。

“私”といふ言葉を、少し砕けた形にしたのが“わたくし”の“く”を取った“わたし”といふ言葉であり、更に砕けると“た”が抜けて“わし”といふ言葉になる。私がこの“わし”といふ言葉を使ふのは、家内に対して自称する時だけである。だから、私にとっては、「“わし”は妻専用の言葉」であって他の人には決して使ふことがない。

これが日本語の豊かさの一つである。自分の妻専用の言葉を有つ、とは何と贅沢な事であらうか。欧米諸語の貧しさに比べてみて、しみじ

み有難いと思ふものである。

“わし”に対する“対称”は、普通は“お前”といふ言葉であらう。これは、「自分の前」の“前”といふ言葉であって、「自分のすぐ前にゐる人」といふ意味の言葉である。わが国では、尊敬すべき人から遠く^{へた}たつてゐて、なれなれしく近づくのは失礼だと考へられてゐるので、尊敬すべき人は“あなた(遠くの方の意味)”と呼び、最も親しい人は近くにゐるので“お前”と呼ぶのである。

私は、夫婦の間では、夫は“わし”を自称して対称には“お前”を使ひ、妻は“わたし”を自称に使ひ、対称には“お前さん”を使ふのがいかにも夫婦らしい使ひ方ではないかと思ふのだが、実際には、自称には“わし”を使ふが、対称には“お母さん”を使つてゐる。

“お母さん”は、四十二年前、長男が生まれた時に呼び始めて以来の呼び方であるから、もう定着してしまつたやうである。孫が遊びに来た時、孫に合わせて“お婆ちゃん”と呼ぶことも稀にはある。

さて、今まで私が使つたことのある自称を列挙してみると、先づ、家内に対しては“わし”、息子と娘に対しては“お父さん”孫に対しては“お爺ちゃん”、甥と姪に対しては“伯父さん”児童・生徒に対しては、“先生”その他の場合は“わたし”が“私”^{わたくし}といふ言葉である。

日本語の再発見

これらの言葉は、皆、名詞である。“わし”を除いた他の言葉は、皆、相手が私に対して私を呼ぶ時に使ふ言葉であって、それをそのまま自称としてゐるのである。相手が私を“お父さん”と呼ぶからその言葉を使ってそのまま“お父さん”と自称するのである。このやうに、相手に応じて自称の言葉を選んで使ふのがわが国の習慣である。

幼児の場合には“固有名詞”が使はれることがある。幼児はたいてい“僕”といふ自称を使ふ前に、固有名詞である自分の名前を、自分が親から呼ばれる通りに自称として使ふものである。例へば、親から「太郎！」と呼ばれてゐる子供は、自分でも“太郎”を自称し、「太郎君！」と呼ばれてゐる子供は、“太郎君”と自称するものである。

それで、子供が“僕”といふ言葉を使って自称するやうになると、遂に、親が「太郎！」と呼ぶところを、「僕！」もしくは「僕ちゃん！」と言って呼び掛けたりする。

自称と対称とは、大よそ対になつてゐて用ひられる。例へば、“私”と“あなた様”、“わたし”と“あなた”、“わし”と“お前”、“僕”と“君”、“俺”と“貴様”と言つた具合である。

このやうに使ひ分けることによって、相手に対し、尊敬の心や親近の情を表してゐるのであるが、かういふ言葉の使ひ分けは、教へてやらないとなかなかうまく使へるやうにならないやうである。

だから、言葉の教育が軽視されてゐる現今では、親や教師に対して“お前”といふ言葉を使ふ子供があるわけである。かうして言葉が乱れて来ると、「言順ならざれば事成らず」で、親子、師弟間にあるまじき不祥事件が惹き起されるやうになるので、恐ろしいと思ふ。